中西悟堂『自然愛好者の敗戦前後』

菅井憲一

日本野鳥の会を組織され、野鳥の神様と言われ親しまれた中西悟堂氏が亡くなられて既に久しくなります。悟堂氏が、福生の自然を愛し、永住の地として居を構えようとされた前後のことを今回は紹介しましょう。

それは、太平洋戦争も末期、昭和十九年九月にさかのぼります。昭和四年から住んでいた東京杉並区善福寺の地は、風致地区として自然そのものの姿を保っており、草木、昆虫、蝶、魚類も生息し、善福寺川湧水池周辺を訪れる野鳥は八十種に及び、営巣種も二十三を数え、それ等の生態を調べるには最良の環境にありました。

それが東京府の方針で、遊園地が作られたため自然の風景、植生が一変し、昭和十九年には軍が占拠し残る雑木林を切り倒し、防空壕を作ったため、かつての風致地区としての景観は台無しになってしまったのです。加えて大戦末期の資源枯渇による用紙難から、昭和九年から刊行した野鳥の会の機関誌「野鳥」は廃刊に追い込まれ、会の運営も断念せざるを得なくなりました。世相を見据えた悟堂氏は、「大地に即した生活をしながら著述に没頭する生活へ踏み切る」一大決心をし、それに応わしい地として福生を選んだのでした。

悟堂氏の目に止ったのは、今の加美上水公園の周辺でした。そこは、

「玉川上水で町を隔てられた、一軒の家もない山林で、小高い堤に登ってみると目の下に多摩川も見えるすばらしい環境であった。―中略―山林そのものは、むかし玉川上水を掘さくした土を盛り上げたものが、そのまま山林化したもののようで、そこへ高い多摩川堤からの斜面が幾つにも細分された小さい尾根と谷を形成しており、堤の上には樹齢も古い樅の大木が亭々とつらなっていた。その堤へ登ってみると、そこから多摩川の岸へと傾斜する斜面は相当広く、川の対岸には丘陵の森があって、丘陵左手の遠い空間には丹沢山塊が並び、丘陵の右手上流には武甲山の兜形のドームがせり上っていた。そして脚下の河原からは河鹿の声がきこえ、コチドリやセグロセキレイの鳴声もきこえてくる。山林中にはカケスのジャージャーの嗄れ声がしきりだった。」

この凡そ五〇〇坪の土地は、田村和一氏の好意により借りることが出来、山林には櫟（くぬぎ）の木が多かったので「櫟扉居（らくひきょ）」と名付けた屋舎を建てる計画にしました。今もこのあたりは当時をしのばせる緑が残されており散策を楽しめ、玉川上水の空堀跡を覆うように櫟の古木が縦横に枝を伸しています。住まいが出来る迄の間家族は田村家の離れを借り、悟堂氏は奥座敷を書斎として使う便宜を受けました。櫟扉居の工事は直ちに取りかかったのですが、前払いをして頼んだ都内の工務店に夜逃げをされ中断の止むなきに至ります。

文学の中の福生 3

やがて昭和二十年に入り一月九日、東京はB29七十二機による空襲を受け、三月九日には東京大空襲で死者十万人にも登る被害となりました。福生でも米軍機の機銃掃射を頻繁に受けるようになり、「河原で米をといでいる老婆を低空飛行で狙撃して殺害」されたり「青梅電車が進行中に狙撃され、車内の乗客の一人が股に銃弾を受けて病院に収容されたり」という状況になりました。

一時は永住を決めた福生の地も、住宅は建たず、空襲による不安から二十年六月山形県蔵王山麓本沢村に疎開をし、終戦を迎えて十二月三十日山形から帰って来ました。しかし田村家から借りた土地は軍が占拠し、林は切られ防空壕の穴だらけの状態であったため、住むのを断念し対岸の秋川市二宮の農家で借りた蚕室に落ちついたのです。

戦争の真中福生で詠んだ短歌

○三月九日夜の大空襲

十数里の東京の空ただに赤し
　茫然と土手にわが立ちつくす
凩に研がれて蒼き川のすゑ異様に赤き
　不吉の空あり
凩に礫となれる屋根の雪顔を打てども
　ただ火を見守る
見てゐること済まなくなりておろおろ
　と行きつ戻りつ西多摩の土手

○空襲の日

子を負ひて壕を出づれば照明弾
　標札の字をあざやかに見す
葬列は今日も練りゆく一過せし
　機銃掃射の翌る日の村
川べりに米とぎゐたる老媼に
　あびせゆける掃射憎しとも憎し

○虚脱の日に

悪夢とする日々がつづけど夢さへも
　結べぬ夜々の短かき眠り
現在だけを生きつつ人と逃げてゆく
　犬の頭を撫でてもやりつ
この戦はや詮なきを新聞の戦果の白書
　なほしらじらし
知己のもとたよりて行ける疎開らも
　多くは仲のたがふとききしが

2

中西悟堂氏は明治二十八年（一八九五）金沢で生まれました。父富男、母タイの長男。祖父益重勝は加賀藩士・父富男は海軍軍楽隊教官でしたが日清戦役で負傷、肺患を併発し明治三十年十二月死去、以後父の長兄元治郎の子として育てられました。元治郎、後に悟玄と名乗り、半休を号します。若くして自由民権運動に参加、明治二十一年にはサンフランシスコに渡り愛国同盟を組織し、民権派の新聞「十九世紀新聞」を発行。この時の仲間には、町田の自由民権家石坂公歴、埼玉県入間の政治家で後に衆議院議長を務めた粕谷義三らがいました。粕谷義三は同二十二年七月ミシガン州アンナーバーで南方熊楠と出会っています。元治郎は在留する邦人が「キリスト教に心酔するのを憂え」、帰国後仏教を修め、同二十六年シカゴで万国宗教会議が開かれるに際し、多いに日本仏教を海外に紹介するため天台宗土宜法竜ら四師の出席の斡旋をされるなど仏教復興に力を注ぎました。その後同三十九年、上野一山の東漸院住職となっています。

一方政治の方では板垣退助の秘書をするなど自由党員として大井憲太郎等と活動を共にし、後に自らも多摩を地盤として衆議院議員を目指したが、大正三年三

月病のため五十一歳で逝去された。

この様な経歴を持つ父から悟堂氏は僧となるべく教育を受け、十歳の頃秩父山中観音寺に預けられて百八日の坐行、各二十一日の滝の行、断食の行を受け、野鳥に親しむきっかけを得ます。十五歳で得度、大正元年から天台学林に学び僧侶の生涯に入る。傍短歌、詩、小説を書き続け次々に発表、一時は作家を志ざしたのですが、社会思想の対立に強い疑惑を抱き、昭和元年思う所あって木食生活に入り、自然界の中に身をおき動植物の観察を始めました。木食生活とは、「米食を絶ち、火食を絶って、水で丸めただけのソバ粉を主食とし、大根の根も生で食べるほかは木の芽や大根の葉や野草を塩で揉んで食べるだけで、入浴の代わりに野川にひたり、ゴザを敷いて即席の書斎」とするような毎日でした。これを昭和四年迄続けるのですが、この生活が自然保護に対する後の活動の基盤となったのです。

悟堂氏の思想の根本は仏教にあります。仏教では「四大」と言って地、水、火、風、大地、水、光と熱、大気を地球に生きとし生ける者の生存のギリギリの基盤ととらえ、坊さんが重病となると「四大不調」と通知し、遷化の通知は「四大不和」のため云々と書くそうです。「四大」を大切にし「山川草木国土悉有仏性」と言う仏教の自然観に立って愛情にもとづく人倫の恢復を、多少とも促進することが出来るなら、社会浄化の一端ともなろう。という考えに立って自然保護への取り組みは始められたのです。

「思うに明治維新以来、日本は富国強兵を国是として、西洋に追いつき、追い越せで、この方針一本槍で進んで来た国であった。したがって祖先の尊い遺産である日本の山河、山紫水明とも自称している日本の自然をそのまま子孫に伝えるという教育は皆無であった。」この様な自然観は、明治四十年に郷土の産土の社の森を守ろうとたった一人で明治政府の強行しようとした神社合祀令に対し反対運動に立ち上った南方熊楠にも共通するものです。南方は、早くもエコロジー（生態学）の立場から神社の森の自然の破壊は人間の破壊、さらには地球全体の破壊につながると考え、自らの住む和歌山県田辺町周辺の神社合祀反対運動を展開したのでした。この考え方と悟堂氏の野鳥観を比較してみましょう。

「鳥は空間生活者で、渡り鳥はその最大の地球的規模の生活者であり、島々や海辺で巣を作る鳥以外は山林、湖沼、河辺に巣を営む。従って彼女らのすみかは日本中の山林、原野、水辺なのだ。そこでそういう鳥たちを自然のままで守ることは、とりも直さず日本の山河を守ることにもなる。」

それ迄の鳥に対する日本人の一般的な接し方は、愛飼としての飼育や狩猟の対象としての鳥打ちが主でした。それを自然の中に生きる生態をそのまま観察する探鳥という、鳥と自然を親しむ方法を提唱、実践されたのです。

昭和九年、日本野鳥の会発足に際し協力を惜しまなかった一人に民俗学者柳田国男がいました。柳田は「野の草にも鳥にもそれぞれ生活と目的があり、絶えず人間と接触しながら営んできた長い歴史があった」と野鳥をとらえ、昭和三年に

文学の中の福生 3

は「野鳥雑記」を表わし、昭和九年の「雀談」では、「少なくとも三十種に近い場合と心持を表示し、さらには自分の楽しみの鼻歌までこしらえているのは、まったく雀の国独特の文化である」などと味のある観察を発表しています。

柳田は、それ迄に音信のあった南方熊楠の神社合祀反対にも深い理解を示し、南方の反対意見を書き綴った二通の書簡を東京で「南方二書」とし題して自費で出版、志賀重昂ら数十名の識者に配布し協力をしています。南方は大乗仏教（真言密教）を以って西欧思想に立向った在野の学者でした。神社合祀に反対する姿勢は、自然保護に後半生をかけた悟堂氏と共通する所があると思われます。悟堂氏と南方との関係は今の所確認出来ていませんが、柳田の仕事として自然保護への目配りは高く評価すべきでしょう。また三人のなした仕事の共通項を在野の学問のあり方としてとらえ直す必要があります。

中西悟堂（65歳）　撮影　佐藤春雄

中西悟堂著『定本野鳥記』3巻
（春秋社刊より）

3

昭和二十一年から八年間の秋川市二宮での生活で悟堂氏は野鳥の観察を再会、同二十二年四月「野鳥」を再刊します。また日本全国をまわり鳥類保護運動に力を注ぎ、国土緑化推進委員、首都緑化推進委員、自然保護協会評議員などの職にもつき、その後の自然保護活動の足がかりとなる仕事を多くされました。

最後に秋川在住中の西多摩探鳥の記録の中から、福生に関係する文章を紹介します。

都下の岩燕（『定本野鳥記3』）

「青梅線福生の町の多摩川に、多摩橋という長々としたコンクリートの橋が架っている。上流、下流とも広々と眺望のきく、景色のいい吹きさらしの橋だが、五日市街道の衝にあたっていて、山寄りの五日市方面から来るトラックや、買出しのリュックは、この橋詰めの巡査派出所で一応は取り調べられる。怪しいふるまいの者たちにとっての関所である。今年はこの橋の裏にもイワツバメが巣食っ

ていて、この橋近くに仮寓している私が、上京ごとにここを通るとき、必ず河上にその姿を見た。」

（昭和二十二年十二月）

○尾長

冬槻(つき)(1)のうれ(2)を離れて飛ぶ尾長
　あとよりあとより次の槻へと
水色のつばさ搏(う)ちつつ尾長らは
　こもごもに啼きて多摩川を越ゆ
その翼開きつ閉ぢつ尾長らの
　長尾(なが)のびやかに広き川越ゆ

注(1)けや木の古木、(2)枝の先（昭和二十一年四月）

シジューカラ　（画・山下史人）
中西悟堂著『定本野鳥記』3巻
（春秋社刊）より
（平成2年7月1日福生市の鳥に制定）

これは福生の多摩川沿いで詠んだ歌ですが、今もけやきの大木が見られる永田橋近くの景色ではないでしょうか。

私の二人の子供もお世話になった福生第五小学校は昭和四十五年から愛鳥活動に取り組み、学校の前に広がる多摩川の河原と、学校裏手の段丘の樹林（子供達はエメロンの森と愛称しています）に見られる野鳥観察を通じて、自然を大切にして行く心を育てる教育を続けています。また市民の中でも、福生自然観察グループの方々が福生の自然環境を守る様々な取り組みを昭和四十九年から意欲的に続けておられます。これらの活動の当初の指導にあたった石川操子氏、岡田紀夫氏は、悟堂氏ともかかわりを持たれた野鳥の会のメンバーでした。また市でも教育委員会で自然の調査を多方面から毎年実施し、報告書として刊行しています。

かつて悟堂氏が大地に即した生活をしたいと決意し、永住を願った町が福生でした。豊かな自然に恵まれた福生も戦後四十五年を経て大きく環境が変化しました。前述の地道な活動を大切にして、今後多摩川の自然と、市内に残る武蔵野台地を形成した雑木林の緑を守り育て、すばらしい景観の町にして行きたいものです。それが市民一人一人の責務でもありましょう。大地の中に生きた人、中西悟堂氏は後世に生きる我々に自然の大切さを遺言されたのでした。

注　「自然愛好者の敗戦前後」は『かみなりさま』（永田書店　昭和五十五年）に所収

中西悟堂の業績の大半は、『定本野鳥記』全16巻（春秋社）に収録されています。